

幽霊時代
栗本 薫
講談社

(11/13刊・¥890)

何で今ごろ、という感想は、久保書店のSFノヴェルズにだけ、感じるものかと思っていれば、そうでもなかった。本書の「エンゼル・ゴーホーム」は、もちろん『火星人ゴーホーム』のパロディなのだが、雑誌掲載時に読んだときには、どうしてブラウンのパロディを今ごろやるのかと、ちよつと疑問だった。何しろ『火星人——』の著者ブラウンは、アメリカでは全く忘れられている。もともと短編作家が高く評価されない国だ。亡くなって久しいせいもあって、現役のシェクリイより、覚えていてる者はもっと少ないだろう。——だからこそ「何で今ごろ」だった。けれども、ブラウンが栗本薫にとって、SFの原点であったのなら、その意味もまた変わってくる。六〇年代半ば前後に、『火星人——』の与えた影響は、そのころの読者——今日の日本作家にも、色濃いものがあつたわけだ。

SF短編集としては、本書が著者の二冊目にあたる。SF味の強い「ケンタウロスの子守唄」（最初のエピソードがいい）から、風俗小説風の「水の中の微笑」、自身の存在が希薄化していく奇病を描く「幽霊時代」まで、五編が収録されている。